受け継いだ町の宝を地域活動の拠点に。

「八幡杜の館」
～八幡杜の館運営委員会～ 事例01

天賞酒造の酒蔵を八幡杜の館に 地域が主体的に管理・運営

町のシンボルを後世に残したい。
地域からあがった熱い想いが結実。

「市の都市景観賞も受賞した八幡町の街並みの象徴的な存在でしたからね。町の皆さんからも残したいという声がたくさんあがりました」と語る八幡杜の館運営委員会委員長の細谷さん。

天賞酒造が川崎町に移転する際、地域から「何とか残したい」という声があがり、八幡地区まちづくり協議会と区役所が協議。その結果、市が土地を購入し建物を移築、以前天賞酒造の庭だった場所を公園として一体的に整備し一緒に管理することになりました。公園は池を中心に風情ある憩の場を住民に提供しています。「八幡の宝が残されたようでうれしかったですね。館内には天賞酒造を紹介したパネルや古地図などを展示して、今につながる町の歴史を伝えています。」

入場は無料。多くの人が訪れる地域の観光スポットになっています。

運営委員と協力委員の協力体制。
無理のない形を模索しながらの運営。

八幡杜の館は運営委員と協力委員で運営されています。

「八幡杜の館」の運営に当たり、八幡地区まちづくり協議会を母体とした運営委員会を設立。13人の運営委員が館内で行う展示会やイベントの企画立案などを行っています。

日直を行うボランティアの協力委員は10名。運営委員の知り合いの方に声がけしたり、近隣の町内会からの推薦でお願いしています。

「協力委員は主婦の方が多いので負担にならないような形でお願いしています。担当時間も、家事のことを考えて10時から16時までとしたり、午前・午後に分けたり工夫をしています。」

地域の宝を活用する工夫 学校との連携や サポーター制の導入

地域の学校とも連携。
若い世代が地域を知るきっかけに。

八幡杜の館を巡る地域の輪は若い世代にも広がっています。女子高生が地域の歴史の授業の一環として見学に来たり、小学生が広瀬川の研究など総合学習の授業として訪れるという機会も増えています。「八幡って昔はこうだったんだ、と目を丸くして感動してくれます。」

今秋には小学校と連携して絵画コンクールを開催。テーマは「八幡町のいいところ」。「子どもたちに町のいいところを発見してもらうことは、今後のまちづくりにとっても大切なことだと思います。」

このような子どもを通したまちづくりは、保護者にも地域との接点が生まれるという意味でもとても意義のあることです。「八幡杜の館」では、今後も継続して開催していく予定です。

今後はサポーター制度も導入予定。
幅広いつながりでさまざまな企画を。

多彩な展示会やイベントを開催している「八幡杜の館」。最近は個人からも「展示用に使いたい」という問い合わせが増えてきています。落語会なども開催しており、地域文化活動の拠点としても利用されています。

また、古民家に興味のある若い女性が訪れることもあるそうです。「町の外からも人が来てくれるのはうれしいことですね。」

活動が広がってきたことから、今後、会を企画部と広報部と管理部に分けて、ホームページを立ち上げるなど、活動を充実させていくそうです。また、今後館内の企画をより充実させていくために、地域内外の方に呼びかけを行い、年間一口1,000円でサポーターとなっていただく制度を計画しています。

サポーター制度を作ることで、資金面だけではなく、展示の企画アイデアを出してもらうという二重のメリットが生まれます。「多彩な企画を行うためにもサポーターを増やしていきたいですね。」

こんな工夫もしています！

町を元気にする 八幡地区まちづくり協議会

八幡杜の館運営委員会の母体となった八幡地区まちづくり協議会は、地域のいろいろな団体から構成されています。さまざまな方々が参加することで魅力あるまちづくりを実現しています。

事例のまとめ

- 地域の歴史的資源を住民が主体的に管理・運営し、地域の学校との連携やサポーター制の導入など様々な事業を企画・実施しています。

市民センターを軸に地域ネットワークを。

「吉成地区地域懇談会」

～吉成地区～ 事例02

各種団体の交流をコーディネート 市民センターから地域コミュニティの活性化へ

市民センターを活用して、地域団体同士の交流を深める。

「1年間かけて地域団体とのつながりを作り、19年度の第1回目の交流会を市民センターで行いました。40団体以上集まりましたね」と、吉成市民センター館長の照井さんは語ります。

「なかなか普段話す機会のない方と話ができ、名刺交換もできてとてもよかった」と言う町内会長さんもいたと言います。

「『地域にはこういった団体や人がいるんだ』ということを知る、いい顔合わせになりました。市民センターが中心で実施していると言うことで、皆さん安心して参加できるのかも知れませんね」と吉成学区連合町内会会長の伊藤さん。

この交流会を機に、40団体の組織力を活かして、子育て、福祉、防災の3つのジャンルのネットワークを構築することになりました。今後それぞれ3つのジャンルごとに具体的に活動していく計画になっています。

数多くの団体の組織力と交流が、新しい可能性と活力を生む。

「このネットワークで普段知り合う機会のない福祉施設の方とも知り合いになれました」とネットワークのメリットを語るボラネット杜の丘の渡辺さん。

「この地域は福祉施設が多いのですが、施設単独ではなく、ボランティア団体などと連携することで地域として支えていくことが必要だと思います。」

福祉や子育てはネットワークがなければ活動できません。障害者や母子家庭の子どもの送迎などは、保育所や児童館やボランティア団体が協力し、それぞれができることを話し合いながら行っていくことが大切です。

「防災においてもネットワークが大切です。今までこの地域は、町内会単位で防災活動を行っていましたが、ネットワークをきっかけに横のつながりが生まれてきました。」

これを機に吉成学区連合町内会で防災組織を立ち上げ、防災の手引きを作成し、全世帯に配布しています。

つながりを広げ 地域に新しい「共助」の仕組みをつくる

ボランティア活動を支援し、新たな地域の担い手を確保。

「市民センターではボランティア活動の支援も行っています。ボランティアを志す方々を対象に、地域の課題に即した講座を行います。地域の新しい担い手を育むことを目指しています」と照井さん。

このように生まれたボランティアをそれぞれのネットワークにつなげていくことも可能になります。例えば、折り紙ボランティアや傾聴ボランティアの方は福祉のネットワークに加わり、福祉施設を訪問するなどの活動を行っています。

「このような連携は、団体交流会で顔見知りになっているからできることです。それぞれのネットワークに入って活動しやすくなっています。」

「仲間づくり」としての「共助」の仕組みづくりへ

「共助とは一言で言えば『仲間づくり』です。いざという時に助け合える仲間づくりが、これからの地域コミュニティに必要だと思います」と伊藤さん。

「他の団体にサポートをお願いする時も団体の特徴を知ることが大切です。特徴を理解することで特徴にあった協力をお願いできます。例えば、老人クラブは労働力は出せないけれど、いろいろと知恵を出していただけますから。」

子ども会、老人クラブ、趣味の会、体育振興会などの組織と連携すれば、人も集まるしいろいろなアイデアも出ます。困っている時でも、他の団体に普段顔つなぎをしておけばいろいろとサポートもお願いしやすいものです。

「今後の防災訓練は『共助』をテーマに行っていきます。その場合、町内会単独ではできません。横のつながりを重視して、ひとつの団体や町内会ではできない『共助』の取り組みもどんどん取り入れていく予定です。」

こんな工夫もしています！

企業も視野に入れて ネットワークづくり

ネットワークの活動をさらに充実したものとするために、地域にある企業とのつながりを深めていきたいと考えているそうです。こうしたことから、今後企業との懇談会などの開催を考えています。

事例のまとめ

- 市民センターを中心として、地域の各種団体とのネットワークを構築し、災害時の「共助」の仕組み作りなどを行っています。

若い情熱を地域活動へ。

「青年部による地域課題解決」

～八木山南地区～ 事例03

アンケートにより地域の課題を把握 課題解決の実行部隊として青年部を結成

地域課題をしっかり把握。災害時要援護者支援の取り組みへ。

町内会や社会福祉協議会の主役は住民。住民が何を考え地域が何を求めているかを知らないで、地域活動を進めることはできません。そこで八木山南地区では、町内会や社協に何を望んでいるのかを把握するため、住民を対象としたアンケートを行うことにしました。

「その中に、災害時に自力で避難できないという回答があり、これは見過ごせないと考えました」と八木山南地区社会福祉協議会会長でもあり同地区連合町内会青年部長の阿部さん。

「さっそく支援を求めているお宅へ訪問し、それぞれ希望の支援者を挙げてもらい要援護者の名簿を作り上げました。」この名簿をもとに、災害時における要援護者への声がけなどの支援が可能になっています。

このように地域課題をしっかり捉えて地域全体で解決にあたろうとしている八木山南地区。現在は「世代間交流による地域活性化と人材育成」をテーマにした「街づくりプロジェクトチーム」をスタートさせています。

地域課題解決の実行部隊として連合町内会青年部を結成。

「地域課題解決のためには大きなうねりが必要です。今後、地域活動を精力的に広げるために仲間がいた方がいいということで、連合町内会長に頼んで青年部を作らせてもらいました。」

青年部は地域課題を解決する実行部隊。PTAなどに声がけした結果、30代から50代の16名が集まりました。「町内会長が中心に集めるとどうしても同年代の人しか集まりません。地域で活動している人望の厚い若い人に声がけをまかせると自然と若い人たちが集まりますね。」

誰しも期待されるとやりがいがあるもの。若い人に自由にやってもらうことで青年部の活動も活気を帯びています。「若い人は発想が面白い。前向きな意見は明るい場所で出るんだよと言われました。以前は集会所に集まっていましたが、最近は明るいファミレスでやっています。」

地域を巻き込む 若い世代の熱い想いが町内会を活性化させる

青年部が中心となって全住民で行う防災体制の構築へ。

「要援護者支援の仕組みができあがったので、今度は住民全員で行う防災対策の取り組みを始めようということになりました。」

災害時の行動マニュアルや被害状況を把握するための調査表を作成して全戸に配布しています。

「災害に備えるための活動もしています。災害時、救援活動などに協力していただく人的協力者と、毛布や消火器などの物資を提供していただく物的協力者を募りました。また、不足している機材は連合町内会・地区社協が連携して購入しています。」

さらに、近隣の病院に被害者の受け入れをお願いして回り、協力を得ています。

これらを青年部が中心となって実施。若い力で全住民対象の防災対策の仕組みを完成させました。「八木山南地区が全住民を対象にした防災対策を実現できたのは、青年部という若い力があったからこそです。若い世代をしっかり地域活動に取り込むことが大事ですね。」

住民の共感を得る広報もしっかり。若い人にも理解してもらえる。

地域住民に町内会が今何を考え、何をしようとしているのかを知ってもらうために広報にも力を入れています。「『いま○○○の検討に入りました!』というように注意を引くような形でチラシを作って回覧しています。一つの文章をできるだけ短くしたり、勝負どころではカラー印刷にするなど、見やすく目に留まる工夫もしています。やっぱり、若い人たちの作るものはセンスがいいですね。」

男性の参加を促すような文言を入れることもしています。その成果があってか、災害時の人的協力者は40代の男性が一番多く集まりました。

「熱く語り、熱くPRしていけば、住民にも声は届くし、若い人たちも集まります。仲間を増やす喜び、住民から感謝される喜びを感じています。」

こんな工夫もしています!

集会所を地域活動の拠点に

連合町内会でお願いして、集会所に平日6時間程度管理人が常駐しています。会計や配布物の振り分けなど連合町内会の事務もしてもらっています。これにより役員の負担を軽減することができています。

事例のまとめ

- 地域課題把握のためにアンケートを行い、課題解決の実行部隊として青年部を設立し、若い力を地域に役立てています。